

しき茶碗ニ用尤さびたるもの也。筒茶碗ニ用ゆるは、右三色之内何れなりとも用竹は油竹ヲ用高山と云所出ル、

荒穂三十貳本立 中荒穂四十六本立 數穂五十七本立

茶筌色々候得共、如心齋右三色ニ被極此内ニ而筒茶碗は何れなり共勝手次第、

〔茶道筌蹄一〕水遣之部

茶筌 油竹のみ用ゆ、白竹青竹は用ひず、

寶來 八十本立 數穂 六十九本 中穂 五十八本 荒穂 四十七本

〔南方録三〕茶筌

軸長 長茶筌 常茶筌

軸長穂の方常のごとくにて、軸の方計四分計長し、休○休の所持狂言袴に用らる、總じて筒茶筌に相應也、長茶筌は前に記す如く、湖○茶名梳に用らる、事茶筌大ぶりには長茶筌よし、常の茶筌にて別義なし、

〔茶道要録上法〕茶盃之事

一茶筌之事圖アリ、又蓬萊流ト云アリ、京師畑枝ノ與太郎ト云者、爾今在テ造ル、穂ヲ太クアラアラトシ、眞穂ヲ細ク輦ニ外ヘハヌルト、内ヲ直ニスルニ付テ、眞穂少長クナル也、好テ用ユ、總ジテ利休形ハ編目ヲ絲二筋ニスベシ、竹ノ目ノ方前ニシテ編留後也、

〔茶傳集九〕一茶筌是は定寸なし、筒茶碗などに軸長を用てよし、白竹す、竹ごま竹とも用、茶碗の大小によりて、茶筌の大小吟味すべし、

〔退閑雜記後編一〕茶せんつくるは、まづその長さに竹きり、穂になすべきところの皮をうすくけ、づり、ろくろにかけて竹のなかをけづり、至てうすく成たるとき、小刀にて八十にも六十にもわ